

遠賀堀川の果たした役割と再生について

正会員 九州共立大学 長弘 雄次

On the Onga-Horikawa, about
the Functional Parts and Restoration
by Yuji Nagahiro

概 要

九州北部を流れる遠賀川は過去度々氾濫を繰り返し、近世黒田長政が福岡藩初代藩主として入部後、その治水、かんがい用水、物資輸送の目的から分水路としての堀川運河の掘さくが計画された。

堀川は北九州市寿命を起点に折尾を経て洞海湾に至る延長10.1km、平均幅11mの人工運河で、1621（元和7）年に着工されたが3年後長政の死去で中断し、127年後第6代藩主継高によって1750（寛延3）年に再開され、岩山の切ぬき、水門の設置などの難工事を経て1762（宝暦12）年に一応の完成をみたが、取水口の上流への移設などによって全工事が完成したのは、1804（文化元）年である。

爾後は洪水防止、かんがい用水の確保による米の生産量増大、物資の輸送特に筑豊炭田の開発とともに石炭の輸送に大きく寄与した。しかし明治中期の鉄道敷設後は石炭の輸送は逐次陸運に切り換えられ、1939（昭和14）年頃には殆んど水運の利用はなくなり、戦後の石炭産業最盛期には洗炭汚水で荒廃にまかされ、生活下排水路と化し往時の面影はなくなった。

しかし、エネルギー革命による筑豊炭田の使命が終った1975（昭和50）年以降遠賀川の水が清浄化するとともに、近時の環境保全意識の高まりから護岸の改良工事も施工されつつあり、住民の遺構保存の気運も活性化し、その再生が期待されている。（治水、かんがい、輸送）

1. はじめに

近世江戸時代に入り幕府による全国統治体制が固まると、諸大名は財政の確立を迫られ、競って米の生産石高をあげるため新田開発に乗りだした。

そのために先ず手をつけたのは河川の治水とかんがい水確保のための用水路の整備、水運の利用であった。従って人工の運河掘さくの土木工事が全国各地で施工された。

これらの新川は堀川という名で名古屋市、大阪市など各地に残っている¹⁾が、題目としてあげている遠賀堀川もその一つである。

遠賀堀川運河は、治水、かんがい、物資輸送の多目的運河として初代福岡藩黒田長政により1621（元和7）年着工されたが、途中一時中断し完成したの

は183年後の1804（文化元）年である。この掘さくは、我が国の著名な土木工事の一つとして、明治以前日本土木史（土木学会）など²⁾³⁾のほか遠賀川流域の郡町市誌⁴⁾⁵⁾⁶⁾に多数とりあげられているが、近時の環境保全、遺構の保存の住民意識の高まりから、この歴史的意義の見直しが盛んとなっている。

本報告は遠賀川の治水、遠賀堀川掘さくの経緯と土木工事、その完成後の堀川運河のかんがい、水運などに果たした役割、そして現在流域のベッタウン化による下排水路化した状況を改善しようとする遺構保存の住民清浄化の運動、それに伴う護岸改良工事施工の現況と土木的遺産再生の見通しなどについてとりまとめた。

2. 遠賀川の氾濫と治水

(1) 遠賀川の概要

遠賀川は嘉穂郡の馬見山（標高 978m）を源流として、筑豊平野を北に流れ、飯塚市で穂波川を合せ更に直方市で彦山川、犬鳴川と合流し、河口近くで西川を合せ響灘に注いでいる。

その流域は6市25町1村にまたがり、流域面積は1030km² 幹線流路延長61.0kmに及ぶ九州有数の河川である。⁷⁾

流域内は古くから水田地帯として栄え、明治時代は石炭の輸送に活躍し、現在のはかんがい、上水道、工業用水の水源となっている。水系図を図-1に示す。

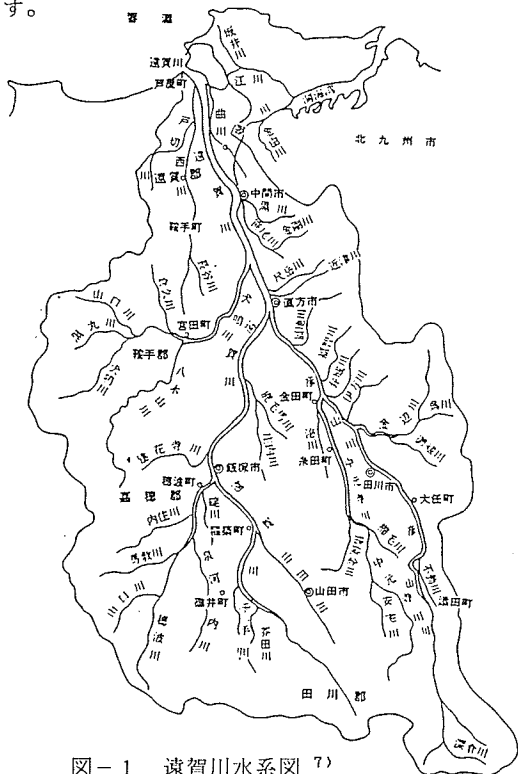


図-1 遠賀川水系図⁷⁾

(2) 遠賀川の氾濫と治水

2000-3000年前の遠賀川は河口より直方市あたりまで奥深い湾形をした海であったといわれ⁸⁾⁹⁾、上流からの土砂により現在の姿となったが、その頃の遠賀川は大洪水のたびに氾濫し、流路が変動した。

江戸時代に入り、福岡藩主として移封された黒田長政によって、はじめて本格的な治水工事に着手した。以来数多くの改修工事が行われ、明治以降にお

いても、石炭産業の発展とともに地下採掘による地表沈下の影響もあり水害が繰り返され、国の直轄工事として一級河川に指定され、建設省遠賀川工事事務所が改修工事、維持管理を行っている。

藩政時代から現在までの主な水害は表-1のとおりである。

表-1 遠賀川水害の記録⁴⁾⁷⁾⁸⁾

西暦	年 月 日	記 事
1673	延宝元. 5. 17	破損所多し、大雨、雷
1720	享保 5. 6. 21	
1732	享保17. 閏5. 10	川筋屈耗多し
1738	元文 3. 5.	
1758	宝暦 8. 5. 27	垣生七手100間余切
1767	明和 4. 6. 7	
1777	安永 6. 6. 1	40年来の大水
1779	安永 8. 8. 4	広瀬土手切、植木、感田、奈良津破損
1786	天明 6. 8. 28	老匠土手50間破損
1790	寛政 2. 5. 24	
1804	文化元. 5. 15	30年来の大水、島津土手40間切
1811	文化 8. 5.	芦屋渡口土手切
1828	文政 11. 8. 9	夏中洪水多し
1836	天保 7.	
1838	天保 9. 6. 28	老良土手、奈良津土手切
1840	天保 11. 6.	水田 田島 11093町歩
1847	弘化 4. 7. 22	水田 田島 309町歩
1850	嘉永 3. 5-6.	
1853	嘉永 6. 5. 15	大木川土手切
1855	安政 2. 5. 18	大木川下、島津見土手切
1885	明治 18. 8. 25	家屋の流失、炭鉱の埋没
1901	明治 34. 7. 2	
1905	明治 38. 7. 26	炭鉱被害大、鉄道、橋梁流失
1930	昭和 5. 7. 18	各所堤防欠陥
1935	昭和 10. 6. 28	
1941	昭和 16. 6. 25	各所の被害大
1953	昭和 28. 6. 27	植木堤防欠陥、死傷231人 大洪水
1955	昭和 30. 7. 6	床上浸水1901戸、床下浸水4212戸
1979	昭和 54. 6. 26	
1980	昭和 55. 8. 28	床上浸水 574戸、床下浸水2789戸

3. 遠賀川運河掘さくの経緯と土木工事

(1) 掘川運河掘さくの背景と目的

a) 掘さくの背景

関ヶ原の合戦で大功のあった中津藩主黒田長政は52万石を与えられ、筑前国に1600（慶長5）年に入部し、福岡藩初代藩主となったが新田の開墾に意を注ぎ、早速遠賀川の豊かな流域に目を付けたが、毎年のように洪水を繰り返す遠賀川氾濫の実情を知って、1613（慶長18）年から兩岸の築堤工事を開始し15年の歳月をかけて1628（寛永5）年に完成し、人員延128千余人が集められたという。¹⁾⁹⁾¹⁰⁾

長政としては、50万石の格式を維持するためにも流域の美田化を計る必要があった。¹⁸⁾

また、遠賀川の河口の幅が狭く、中途に土砂が堆積するため、遠賀川の氾濫は遠賀郡一帯が常襲地帯であり、1620（元和6）年に工事の堤防も役に立たない大洪水に見舞われたことから、長政2度の視察の結果堀川分水路の堀さくを計画した。

b) 堀さくの目的¹⁾

堀川運河堀さくの目的はほかにかんがい用水の確保、物資の輸送の多目的利用があったと思われる。

① 新しく分水路を堀さくすることにより、遠賀川本流の水勢を減少させ洪水防止の治水をはかる。

② 遠賀川右岸のかんがい用水不足を解消するための水源確保。

③ 若松、黒崎の洞海湾方面への物資の輸送路の短縮、従来は河口の芦屋を通り遠まわりしていた。

(2) 堀川運河堀さくの系譜

堀川運河は、北九州市楠橋寿命を起点に中間、水巻、折尾を経て洞海湾に至る総延長10.1km、平均幅員11mの人工運河で、付近の地質は第三紀層中の堅硬な折尾砂岩層が露出し、処々に第四紀層が覆っている。

黒田騒動で有名な家老栗山大膳を総司とし、1621（元和7）年に第1期工事が開始されたが、3年後長政の死去により工事が中断し、その後127年を経て第6代藩主継高によって1750（寛延3）年第2期工事が再開され、車返しの吉田切貫と云われる岩山の堀さく工事を1759（宝暦9）年に完成、洞海湾につなぐ工事でも1762（宝暦12）年には完了した。

なお、取入口の不備から工事の仮通水が巧くゆかず、堀川堀さくに精通した土木技術者一田久作に命じ、備前国（岡山県）吉井川の水門を視察させ、その石唐戸を参考に中間水門を1762（宝暦12）年に完成させた。これを第3期工事としている。

以後かんがい、水運に効果をあげたものの、取入水の流入を良くするため、遠賀川に井手（堰）を設けたことから、上流部の水はけが悪く、洪水時の閉鎖による内水部の被害が発生することとなり、1804（文化元）年寿命水門建設移設、堀川の延長工事を計るための第4期工事が着工され、同年に堀川全線が完工し、現在に及んでいる。

堀川堀さくの主な系譜を表-2に示すが、堀川堀さくの成果をたたえるための堀川疏水碑が1899（明治32）年に写真-1のように折尾駅付近に建てられている。

表-2 堀川堀さくの系譜¹¹⁾¹²⁾

西暦	年 月 日	記 事
1600	慶長 5	黒田長政福岡藩初代藩主として入部
1620	元和 6	長政遠賀川流域視察堀川堀さく発案
1621	元和 7	堀川第1期工事着工、栗山大膳総司
1623	元和 9	黒田長政死去により工事中断
1673	延宝元	洪水おこる
1720	享保 5	大洪水おこる
1732	京保 17	京保の大飢饉で大凶作、疫病流行
1750	寛延 3	堀川第2期工事着工、六代藩主継高
1757	宝暦 7	堀川切貫 車返3間幅で完成
1759	宝暦 9	川幅拡幅完成
1761	宝暦 11	一田久作、備前国吉井水門視察
1762	宝暦 12	第3期工事 中間水門完成
1763	宝暦 13	川端通行はじまる
1767	明和 4	大洪水、多数の死亡者あり
1804	文化元	第四期工事、寿命水門、堀川延長完成
1899	明治 32	堀川疏水碑建設



写真-1 堀川疏水碑（撮影：長弘，1991.3.24）

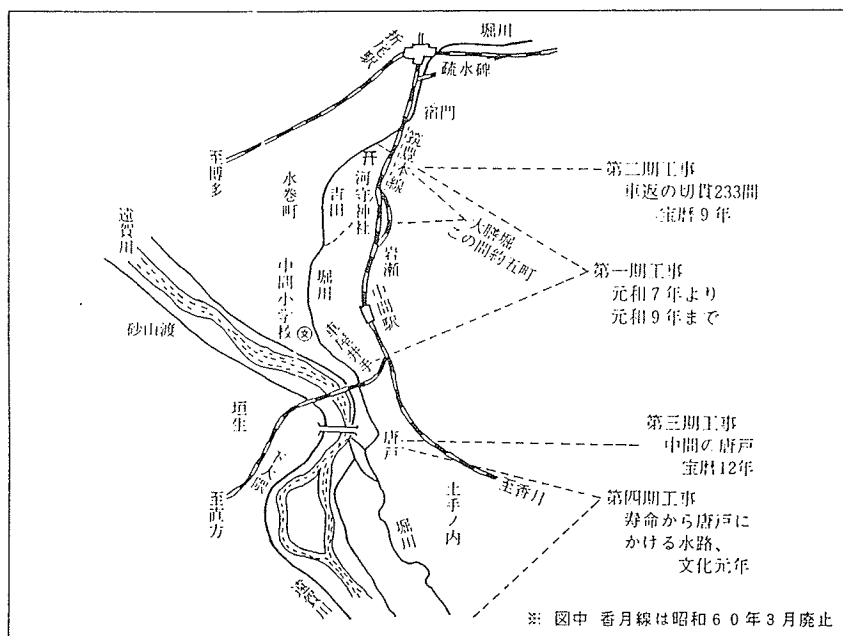


図-2 堀川堀さく工事の推移¹²⁾

(3) 堀河運河堀さく工事

a) 第1期工事(大膳堀)

① 当初計画を遠賀川の東中間村下端より岩瀬、吉田、折尾の3村を過ぎて洞海湾に通じるルートとし、吉田村地内の岩石におおわれた山谷を避け、現JR筑豊線沿いの経路を図-2のようにとった。

② 1621(元和7)年1月より家老栗山大膳を総司として着工し、工期は農繁期、厳寒期をさけて、1月から4月までと、6月から8月までの7ヶ月とした。

③ 工事は着々と進められたが、吉田村の宮尾と御輪地の間は堅い岩層の上に赤土がかぶさった傾斜面のため、堀さく部分が翌日には両側の土砂が埋没してしまうという繰り返しであった。

この付近は第三紀の折尾砂岩層が傾斜 $12\sim13^\circ$ で東側に突込んでおり、その上に酸化鉄で染まった表土がかぶさっているため、堀さく後ずり落ちたものと思われる。

④ またこの地区が貴船神社の社域内であったため、神のたたりという農民の流言が広がり、工事を著しく妨げた。¹⁰⁾¹³⁾

⑤ 付近は掘り下げると湧水し、大膳堀り近くを

掘り割ることは、山の神のたたりがあると信じられて堀さくに強く抵抗をした。貴船神社は水神を祭っている。⁶⁾

⑥ 1623(元和9)年8月長政が江戸に行く途中京都で死去したため、工事は中止された。

⑦ この3年間で開さくした個所は、中間村から岩瀬までの約2kmと吉田村の東北山間から折尾村境までの約600m(大膳堀)であった。

⑧ 工事を指揮する栗山大膳、大膳堀工事風景を図-3に示す。



図-3 大膳堀の工事風景「筑紫遺愛集」より¹²⁾

b) 第2期工事(車返し、吉田切貫)

① 第1期工事中止後遠賀川流域は度々洪水、早魃に見舞われ、1700代に入って工事の再開が検討され、直方支藩から本藩の第6代藩主に継高が継ぐに及び、遠賀川の実情に通じていたことから、直方支藩から隨身した櫛橋又之進を総司として、1750(寛延3)年12月工事が再開された。

② 工事を再開するに当り、村民の意向を徴し、大膳堀を避け、一つ谷離れた西方の車返しの山間を切りぬくこととし、農民の夫役をやめ、人夫には日銭を支払い、工事は急がず長い年月をかけて完成させる計画を立てた。¹⁰⁾

③ 先ず堅い岩山堀さく工事吉田の切貫の試し堀にかかり、その見通しを得て幕府に伺い、1755(宝暦5)年に許可がでて、30人の石工を90人に増やして工事をすすめた。そのため岩盤の堅さに鑿、槌類の修理も多く、鍛冶職を福岡から雇い入れて車返しに鍛冶場を建てたりしたので現場は賑いをみせた。

④ 工事を指揮する一田久作の工事風景を図-4に、人力堀さくの「のみ」跡は写真-2に示すとおりで、現在も「とひ切」と称され現地にはっきりと残っている。



図-4 堀川開さく工事風景「筑紫遺愛集」より¹²⁾

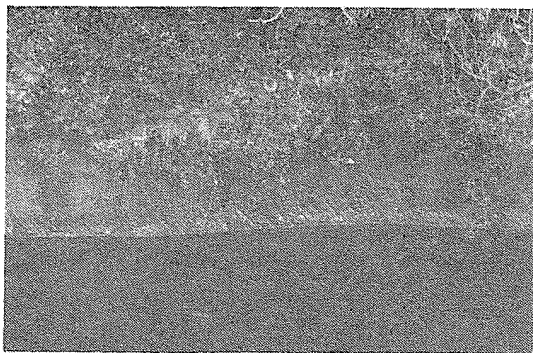


写真-2 吉田切貫の「のみ」の跡
(撮影：長弘、1991.3.24)

⑤ この切貫工事は当初3間で切ぬきをはじめ400mを7年間かけて、1757(宝暦7)年9月に貫通した。その後拡幅工事6間として1759(宝暦9)年に完成した。深さは高いところで6間とされた。

⑥ さらに、下流洞海湾まで通じたのは1762(宝暦12)年であった。

c)第3期工事(中間水門)

① 遠賀川からの取り入れ口を中間屋島付近に定め、数回の仮通水を吉田切貫の貫通後行ったが、地盤が軟弱なため役に立たなかった。

② このため、工事に精進していた一田久作を備前の国(岡山県)吉井川の石唐戸を視察させ、その仕組を持ち帰った。

③ その結果約1km上流の惣社山の堅い岩石をくり抜いて水門を1762(宝暦12)年に完成させた。

④ 写真-3に中間水門(1991.2修復、福岡県指定文化財)の現況、図-5、図-6にその横断図、縦断図を示す。

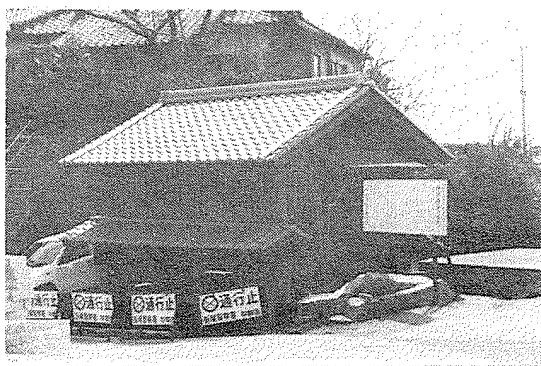


写真-3 中間水門(撮影：長弘、1991.3.24)

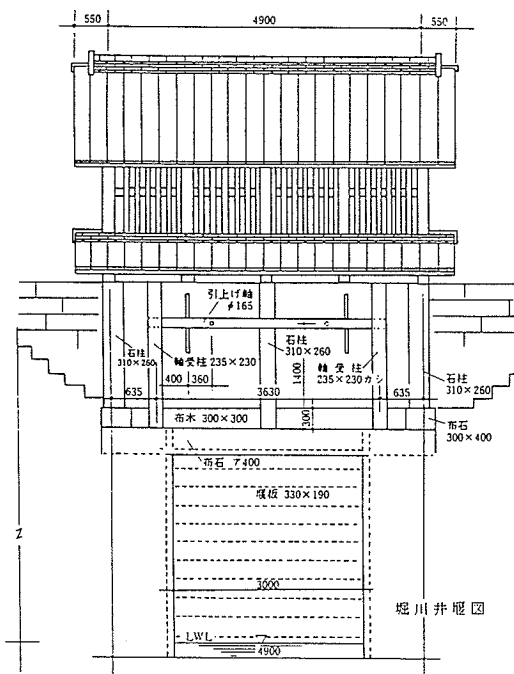


図-5 中間水門横断面図¹²⁾

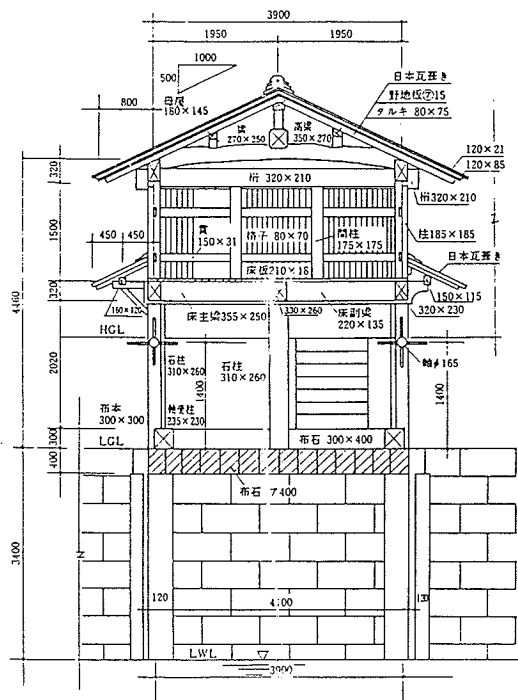


図-6 中間水門縦断面図¹²⁾

⑤ 構造は表戸、裏戸のほか中戸を設け、3枚扉として洪水に備えた。

⑥ 堀川運河は1621(元和7)年に掘さくが開始されてから、141年目の1762(宝暦12)年によく完成し、翌年の1763(宝暦13)年から川舳(かわひらた)の運航がはじまり、分流、かんがい、水運の目的を果すようになった。

⑦ 住民はその功をたたえ、現在でも折尾、水巻に大膳、堀川の町名や橋名が残っている。

d) 第4期工事(寿命水門、堀川延長)

① 第3期工事完成後かんがい、水運に大いに効果があったものの、水門への流入を良くするために本川に数カ所の井手(堰)を設けたことにより、上流部の水引きが悪くなったこと、洪水時中間水門を閉鎖することで内水部の洪水を引き起した。

② そのため、取入口を1.8km上流の楠橋寿命に水門の移設工事と笹尾川を利用した堀川の延長工事(390m)を1804(文化元)年1月に着工して、同年6月には完成をみた。

③ これによって、堀川は工事に着手して以来、

183年の長年月をかけてようやく全工事完工し遠賀川の寿命から、中間、岩瀬、吉田、折尾の各村を経て、洞海湾に通じる運河が完成した。

④ 工事延長した堀川は現在も荒堀川のまま使用されており、その状況は写真-4のとおりである。

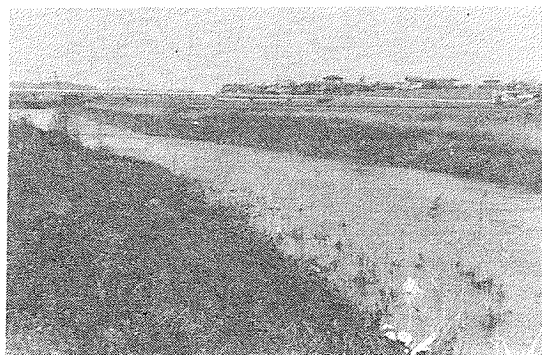


写真-4 堀川上流部の状況

(撮影:長弘,1991.3.24)

⑤ また、堀川の堀直しの古図を図-7に、寿命の水門の現況と1909(明治42)年頃の水運の状況を写真-5、写真-6にしめす。

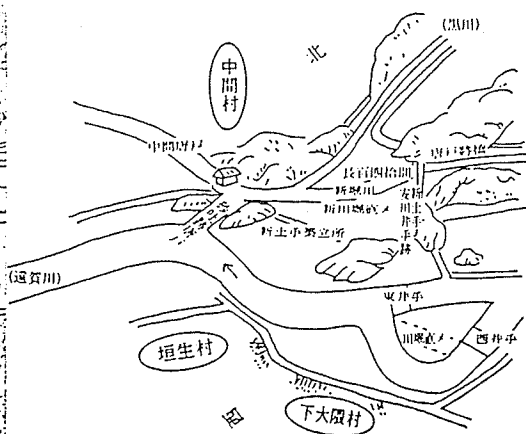
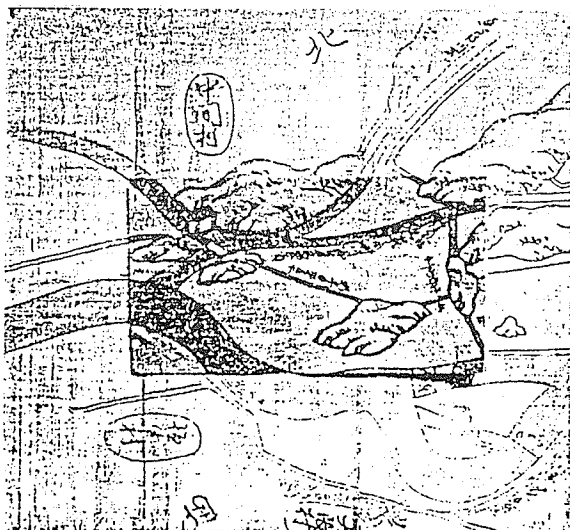


図-7 堀川延長工事、堀川堀直しの図（直方市史⁶⁾より）

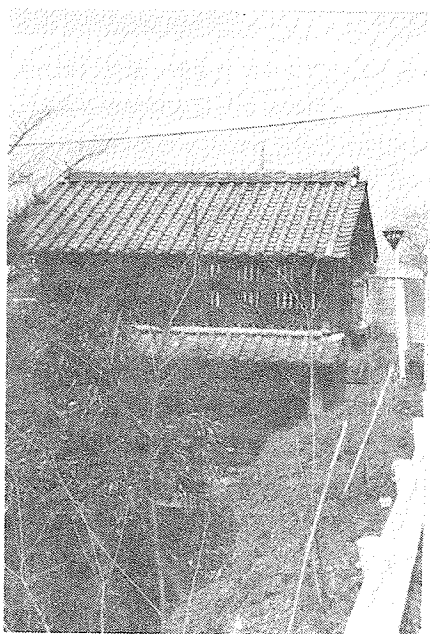


写真-5 寿命水門上流より望む
（撮影：長弘，1991. 3. 24）

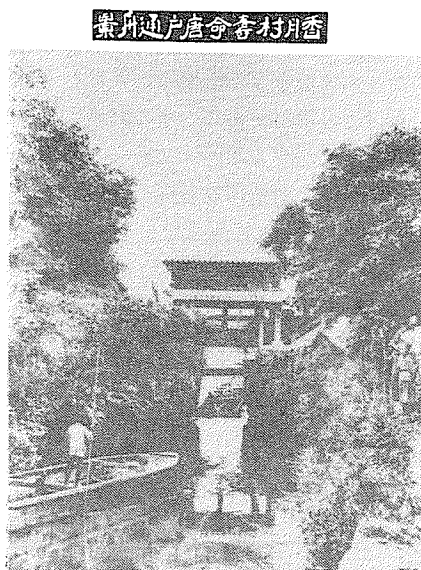


写真-6 寿命水門水運上流より望む
（1909（明治42）年頃，工藤久氏所蔵）

4. 堀川運河完成後の果たした役割、効果

同運河完成後は当初の目的である洪水防止には余り大きな効果をあげ得なかったといわれるが、かんがい用水の確保による新田開発増産、物資の輸送特に筑豊炭田の開発にかかすことのできない石炭の輸送に大きく寄与した。

（1）かんがい用水の確保

堀川堀さくでなくなった田畑は、中間、岩瀬、吉田、折尾の4ヶ所分で田が16.2ha、畑が1.8haであるが、堀川からかんがい用水を引いた村は16ヶ村で480haにおよび、取水口は3ヶ所に井手を設けて取水した。

水下9ヶ村の石高変遷は表-3¹⁰⁾のとおり、用水確保が見込めなかったところは、高地や荒地が開発され、大きく生産高を増やしている。

表-3 水下9ヶ村の石高推移¹⁰⁾

村名	1701(元禄14)年 堀川貫通前(a)	1834(天保5)年 堀川使用後(b)	b/a
猪熊村	590	708	1.20
古賀村	591	597	1.01
楠村	373	409	1.10
坂末村	604	606	1.00
古田村	714	713	1.00
二村	70	533	7.61
伊佐座村	62	531	8.56
下二村	66	464	7.03
立屋敷村	152	383	2.52
計	3222	4944	1.53

また、遠賀川流域全体の堀川完工前後の上納石高を比べると表-4¹⁾のとおり 特に堀川用水の恩恵にあずかった遠賀郡などの増産が大きく、全体として2万石以上の増加があり、藩の財政に大きく貢献している。

表-4 遠賀川筋石高の推移¹⁾

郡名	完工前 (a) 1616(元和2)年	完工後 (b) 1835(天保6)年	b/a
遠賀郡	39351	54884	1.39
鞍手郡	47464	60575	1.28
穂波郡	32602	34644	1.06
嘉摩郡	38860	29566	0.76
計	158277	179669	1.14

(2) 物資の輸送

遠賀川の水運は古くから開かれ、江戸中期までは川船の積み下す荷物は主として藩の年貢米であったが、藩の特産品奨励によって榎実、ろう、菜種子、卵がそれについて輸送された。

宝暦年間に石炭が遠賀川流域で発見されると石炭の輸送が増加した。

遠賀川は水深が浅いので、船底のひらたく浅い川船が使用されたが、その名を「川ひらた」と呼んで

いた。大きさは大型、標準型、小型とあり、堀川の水運では小型の長さ8m、横幅2m、高さ54cm 積載量は約4屯ぐらいであった。

現在は福岡県文化財として折尾高校と芦屋町に各1艘保存されている。写真-7は折尾高校に保存されている標準型で、長さ13m、幅3.42m、高さは57cmである。

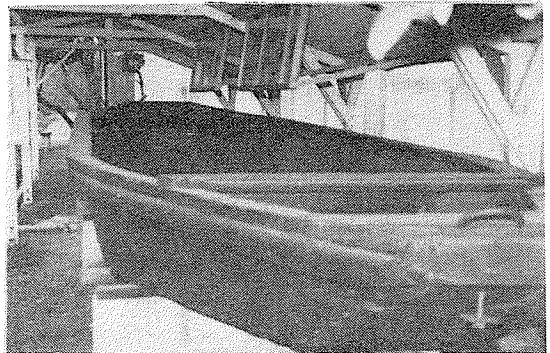


写真-7 川ひらた(撮影:長弘,1991.3.25)

(福岡県立折尾高等学校保存)

堀川運河を通行した川ひらたの数は、表-5¹⁰⁾に1840(天保11)年からの3年間の記録があり、これによると1842(天保13)年では総数9647隻のうち67%の6490隻が石炭(焚石)となっている。

爾後積荷は石炭が主力となり、明治以降は殆んど石炭輸送にかわり、陸運の鉄道に移行する1935(昭和10)年すぎまで川ひらたが表-6¹²⁾のとおり活躍し、我が国の近代化に大いに寄与した。

1891(明治24)年若松~直方間に鉄道開通し、漸次陸運にかわったものの、全盛時の1985(明治31)年には堀川通過船数は、約13万余隻を数えたが1938(昭和13)年を最後に歴史を閉じた。

川ひらたの変遷を図-8に示す。

表-5 天保時代堀川通船状況¹⁰⁾

年	諸荷物	焚石	豊前石穀 焚石	豊前 御米	計
1840年 (天保11年)	2375	2110	620	—	5105
1841年 (天保12年)	2860	3670	—	—	6530
1842年 (天保13年)	2736	5439	1051	421	9647

表-6 堀川通行船数の推移¹²⁾

西 暦	年 月 日	総 量 (隻)
1815	文化12年	1629
1843	天保13年	9647
1910	明治43年	89996
1916	大正 5年	55992
1921	大正10年	29187
1926	大正15年	6267
1930	昭和 5年	598
1939	昭和14年	0

堀川の上流部中間水門、中流部の吉田切貫、下流部の折尾駅下一番橋付近の現況および水運当時の比較を写真-8. 9. 10. 11. 12. 13 に示すが、特に吉田切貫の付近は堀さく当時の面影をそのまま残しており、人力のみによって堀さくした土木工事にたずさわった人々の苦勞がしのばれる。

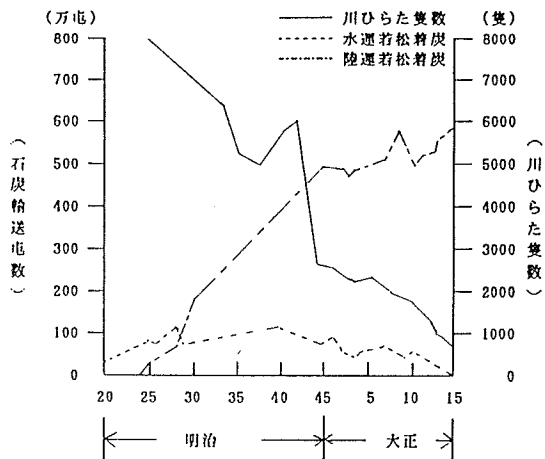


図-8 川ひらたの変遷（直方石炭記念館所蔵）

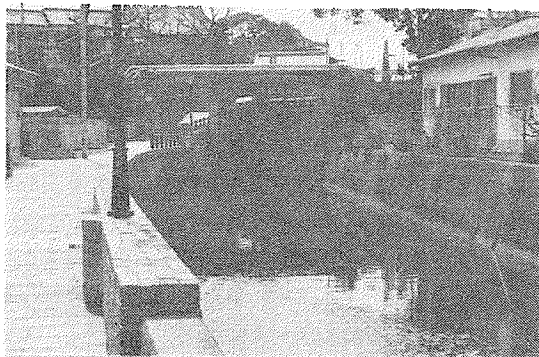


写真-8 中間水門上流を望む
(撮影：長弘, 1991. 3. 24)

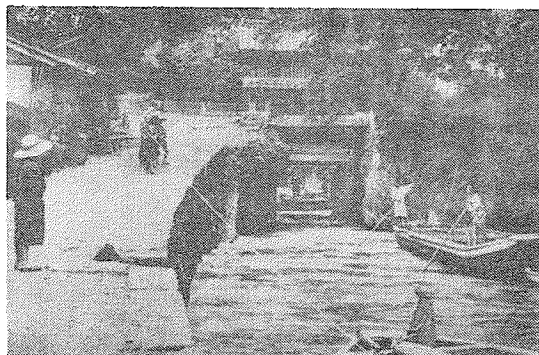


写真-9 中間水門の水運上流を望む
(1910 (明治43) 年頃, 工藤久氏所蔵)

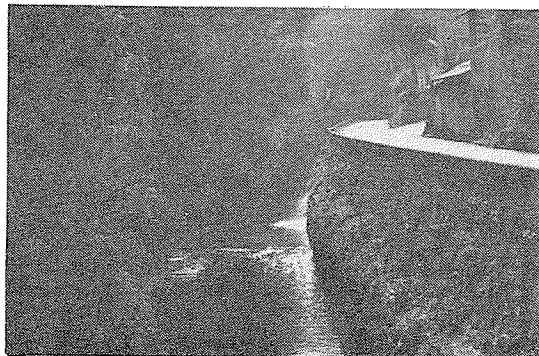


写真-10 吉田切貫上流を望む
(撮影：長弘, 1991. 3. 24)

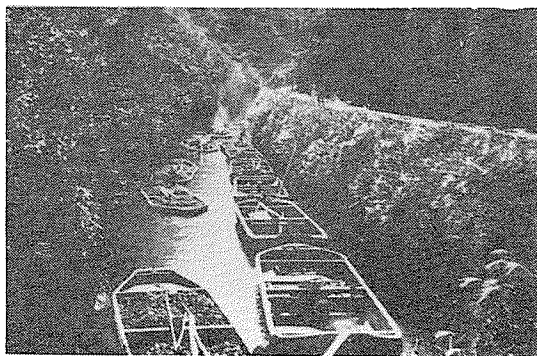


写真-11 吉田切貫の水運上流を望む
(1897 (明治30) 年頃, 工藤久氏所蔵)

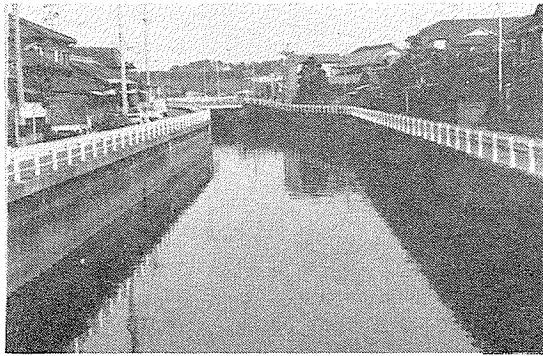


写真-12 折尾駅下流一番橋を望む
(撮影：長弘, 1991. 3. 24)

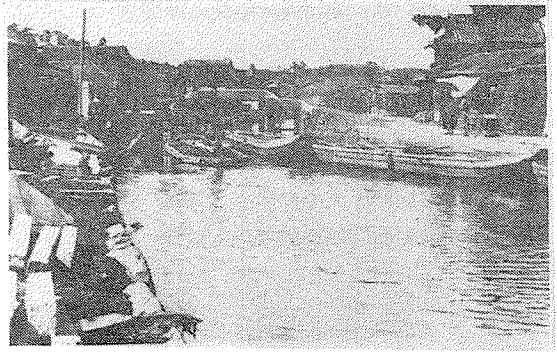


写真-13 折尾下流一番橋を通る川ひらた
(大正初期：写真集福岡100年, 西日本新聞社)

5. 堀川運河の改修と保存再生

① 図-8に示すとおり、1891(明治24)年に鉄道を若松～直方に敷設後、石炭産業の発展とともに逐次遠賀川全域に鉄道網が延長されるにおよび、水運は急速に減少し、1939(昭和14)年には堀川を通る川ひらたは姿を消した。

② 戦後石炭の増産と共に、洗炭水で遠賀川、堀川も真黒な流れとなり、一時は流域住民のごみ捨て場や下水溝化し荒廃した。

③ しかしエネルギー革命による石炭産業の衰微筑豊炭田のすべての炭鉱が閉山した1975(昭和50)年以降は、遠賀川の水も清浄化してきた。

④ また住民の生活環境整備の社会的要請もあり過去の歴史的遺構の保存、再生の動きも活発化してきた。

⑤ 堀川の区域は北九州市、水巻町、中間町の1市2町に行政がまたがっているため、北九州市と福岡県が施行主体となり、年次計画をたて1995(平成7)年に全線完成を目標に改良工事をすすめている。

⑥ 写真-14に、このほど改修工事が完成した折尾駅前の堀川の現況を示すが、自然石を利用し景観を考慮した石積みを行っており、写真-16、写真-17のとおり、同時に改修した堀川橋の銘板には、かつて川ひらたが運航していた情景がほりこまれており、歴史の遺構を残そうとするシビックデザインがとり入れられている。

⑦ これは、写真-15に示す水運の景観をとり入れており、土木工事における保存再生の施行者の意欲をあらわしている。



写真-14 改修後の堀川(折尾駅前堀川橋望む)
(撮影：長弘, 1991. 3. 24)



写真-15 折尾駅前の水運川ひらた
(1916(大正5)年, 工藤久氏所蔵)

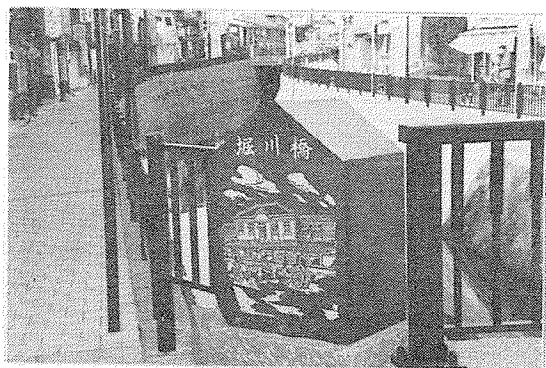


写真-16 折尾堀川橋改修後の銘板（左）
（撮影：長弘, 1991. 3. 24）



写真-17 折尾堀川橋改修後の銘板（右）
（撮影：長弘, 1991. 3. 24）

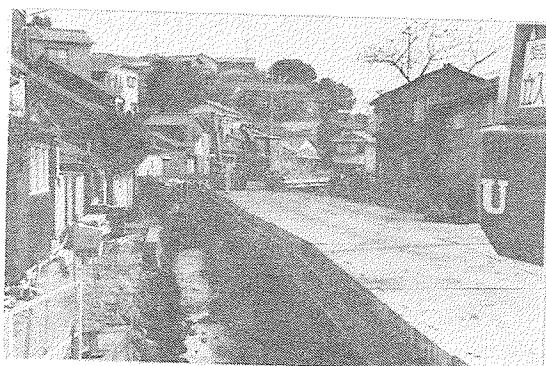


写真-18 折尾橋上流の堀川改修工事
（撮影：長弘, 1991. 3. 24）



写真-19 堀川吉田地区の改修後の状況
（撮影：長弘, 1991. 3. 24）

⑧ 写真-18は、堀川橋の上流、吉田切貫近くまでの堀川改修工事の状況で、河川幅が狭いので、河道中に替道をつくって施工している。

⑨ 吉田の切貫の写真-10の箇所約400mは掘さく当時の面影そのまま維持する歴史ゾーンとすることになっている。

⑩ その上流の水巻町地区は、特に水量が不足していることから、写真-19のような、流水幅を小さくする工事が行われている。

⑪ また、住民の保存再生運動も、行政とタイアップして、各所に写真-20、写真-21のように標識を立て、住民の清浄化意識の向上に努めている。

⑫ 近年はまた、堀川を保存再生しようとする協議会も発足し、活発な美化運動も行われつつある。

⑬ 以上のことから、堀川の流れも可成り清浄化してきており、この頃は魚の姿も見かけ、釣り糸を

たれる人もあらわれるようになり、今後の再生が期待される。

6. むすび

遠賀堀川の掘さくの経緯と土木工事、そしてその完成が果たした役割は、遠賀川の洪水防止の目的は余り達成されなかったものの、かんがい水の確保による新田開発、米の増産には大きく貢献し特に水運は江戸末期から明治、大正にかけて石炭の輸送路として活躍し、北九州のかつての日本三大工業地帯を形成し、我が国の近代化に大きく貢献した。

この堀川を再生するためには、ベッタウン化した住居区域の下水道の整備や、複雑な水利権を解決して、流量を増加するなど課題が多い。

しかし、できるだけ遺構を残した環境を美化

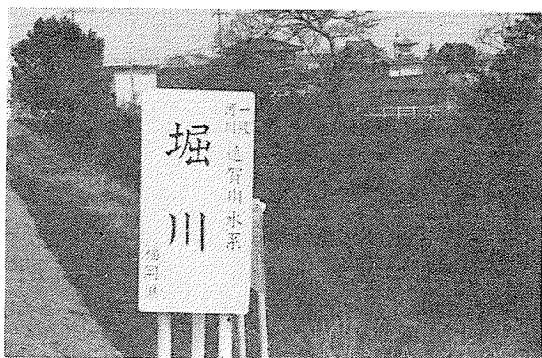


写真-20 堀川の標識（寿命水門下流）
（撮影：長弘，1991. 3. 24）



写真-21 堀川浄化運動の標識
（撮影：長弘，1991. 3. 24）

する工法を取り入れた改修工事や堀川の清浄化運動の高まりから、一步一步清らかな流れの堀川運河がよみがえりつつあり、その保存再生を望んでいるものである。

堀川運河の掘さくと完成後の果たした役割についてとりまとめたが、その内容は深くまた記録の不明確なところもあり、限られた文面のため概況に終わってしまった。今後機会があれば、それぞれの工事内容についてとりまとめたい。

参 考 文 献

- 1) 福岡県折尾高等学校郷土史研究クラブ：遠賀堀川，堀川運河研究調査報告，1983. 11. 28.
- 2) 土木学会：「明治以前日本土木史」，岩波書店，pp. 173-176，1936.
- 3) 土木学会九州支部：「九州土木紀行」，九州大学出版会，pp. 16-17，1989. 11. 18.
- 4) 遠賀町誌：pp. 46-85，pp. 383-406，1986.
- 5) 若松市史：pp. 146-162，1923.
- 6) 直方市史 補巻 石炭鉱業篇：pp. 306-352，1979. 12.
- 7) 建設省遠賀川工事事務所：遠賀川の概要，1965. 2.
- 8) 建設省遠賀川工事事務所：遠賀川，1990. 10.
- 9) 香月靖春：「遠賀川」，海鳥社，pp. 66-73，1990. 2. 15.
- 10) 林 正登：「遠賀川流域史探訪」，葦書房，pp. 131-166，1989. 12. 1.
- 11) 宮崎太郎・桑原三郎：堀川開さくと水門，エネルギー史研究，pp. 131-140，1981. 10.
- 12) 中間市立歴史民俗資料館：堀川の歴史と文化，1988. 11.
- 13) 建設大臣官房技術調査室監修：「ふるさと土木史」，経済調査会，pp. 367-376，1990. 5. 22.